

## 古典教材としての『大鏡』の特異性

福田景道\*

学校教育において、また、その他さまざまな教育機会を通じて、われわれは日本文学の素養を身に付ける機会に恵まれている。その素養のなかに『大鏡』という古典作品の概要が含まれない場合は考え難いであろう。特に、高等学校の国語科で文学史の知識が授けられるときには必ずこの作品が紹介されるし、国語IIや古典（古文）

などで教材化される事例は決して少なくはない。高校古典教育の代表的な教材の一つと見なされている<sup>(1)</sup>。こうして、『大鏡』の存在とその内容は着実に周知されるのである。ところが、歴史物語という曖昧なジャンルに包括されなければならないことにも一因があるが、『大鏡』の内実が正確に理解される条件は十分には整っていないと言わざるを得ない。以下にこのような事例のいくつかを指摘するはずである。

そもそも歴史物語とは物語（文芸）であつても歴史としての機能も持つ一連の作品群を意味するが、各作品の組織・文体・趣向などは決して一様ではない。また、その多くは既成の文芸の概念から大きく逸脱する一面をもっている。中でも、歴史物語中最も完成度が

高いと見なされ、文芸としての評価も最も高い『大鏡』において、この逸脱もまた最も顕著に典型的に現れるように思われる。そこで、現行の高等学校国語科の教材から推定できる範囲で「逸脱」する教材への対処の可能性を追求してみたい。

### 一

さて、国語IIや古典の教科書に古文作品の本文が採取される際は、その作品に関する基本的な事項が略説されるのが一般的である。また、副教材として随意使用される「日本文学史」と題される単行書には、より詳しく各作品に解説が加えられているはずである。これらの成文化された解説によつて、学校教育において『大鏡』がどのように把握されているのかがある程度は推定できる。たとえば、まず、この作品の外観に関して、次のような共通の認識が容易に抽

\* 島根大学教育学部国語教育研究室

表1 教材における『大鏡』概説事項

教科書

事項	国語 II										古典(総合)						古典(古文)																				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	
①文徳帝 ～後一条帝	○								○	△		○	○				○	△	○				△	○	△	○	○	○			○	○	○			○	
②14代	○			○	○				○	○			○				○						○	○	○	○							○	○			
③嘉祥三年 ～万寿二年				○	○				○				○	○	△		△	○	△	△					△	○	○						△		○		
④約176年	○			○	○				○	○			○	○	○		○	○	○				○	○	○	○	○	○					○	○	○		
⑤紀伝体	○	○						○		○	○		○	○				○	○				○	○	○	○	○				○	○	○	○	○		
⑥五部構成										○			○					○					○														

副教材 <日本文学史>

事項	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
①文徳天皇～後一条天皇	○	○	○		○	○	○		○	○
②14代		○			○				○	
③嘉祥三(850)年～万寿二(1025)年	△	○		△	○	△	△	△	○	△
④176年(170余年、約170年、約180年など)	○	○		○	○	○	○	○	○	○
⑤紀伝体	○	○		○	○	○	○	○	○	○
⑥五部構成	○							○		

(注) ○は当該事項が明記されていることを、△は不完全であっても当該事項の内容がほぼ記されていることを示す。

出されるであろう。

『大鏡』は文徳天皇から後一条天皇までの十四代、嘉祥三(八五〇)年から万寿二(一一〇二五)年までの一七六年間(一七〇余年、約一七〇年、約一八〇年などの場合も含む)を対象とし、その形態は紀伝体に基づく五部構成であるという理解が、管見に入つたほとんどの教科書とすべての副教材に共通する(表1参照)。また、この理解を否定すると判断できる記述は誤植を除いて皆無に近い。本稿で問題とするのは、この共通理解そのものにほかならない。

まず注目したいのは、『大鏡』の記事が文徳帝即位の嘉祥三年に始まり、後一条帝治世の万寿二年に終わるといふ知識が高校卒業までに与えられる可能性が極めて高いことである。これが世間一般の常識にもなる。

文徳天皇と申みかどおはしましき。そのみかどよりこなた、いまのみかどまで、十四代にぞならせたまひにける。よをかぞへ侍れば、そのみかどくらゐにつかせ給嘉祥三年庚午の年より、ことしまでは、一百七十六年ばかりにやなりぬらん。(四〇頁)

この明言に導かれて「文徳天皇紀」が『大鏡』の歴史叙述の劈頭を飾る。「ことし」が万寿二年であることは「ことし、万寿二年乙丑とこそは申めれ。」(「後一条院紀」五七頁)と後述されることによつて明白である。ここには、文徳朝から万寿二年までが『大鏡』に叙述されると確言されている。諸教材の記述は多くこれに基づくのかもしれない。しかしながら、この言辞は『大鏡』全編にわたつて有効なのではない。「大臣列伝」は文徳帝の三代前の嵯峨帝時代に活躍した藤原冬嗣に起筆され、「藤氏物語」と通称される部分はそれを

るかに遡って鼻祖鎌足の時代（大化改新）に端を発するのである。さらに「昔物語」の冒頭には光孝帝の即位が特立する。したがって、文徳帝からの十四代、一七六年というのは、あくまでも「天皇本紀」に限ってしか言えないことになる。「本紀」は六巻本『大鏡』の第一巻に収まりきる長さ（日本古典文学大系本では全二五一頁中約二〇頁）しかなく、残りの大部分はこの一七六年間には包含できない。まったく無関係であると思なされなければならない。ここに最初の問題点がある。成文化された教材からは、『大鏡』に文徳朝以前の出来事がまったく叙述されないという不正確な固定観念が形成される可能性が極めて高いのである。

さて、『大鏡』が文徳帝即位に起筆されるという認識の淵源は、次のように、すでに明治三十八年の藤岡作太郎氏著『国文学全史平安朝篇』に窺える。

大鏡は、文徳天皇の朝より後一条天皇の万寿二年まで十四代、およそ百七十五年間の記事にして、まず文徳より後一条までの御略伝を記して、その母后の事を代々の間に合せ記す。次いで左大臣冬嗣より太政大臣道長まで二十人の藤家の大臣を伝し、その子孫の事をも併せ記し、その後、鎌足以来の事、氏神、氏寺の事、道長が堂塔建立の事等を記して、藤原氏の伝記を終る。余談として賀茂、石清水臨時祭の起源、延喜・天曆の政治、村上源氏の事、歌道の逸事、およびその他の雑話を挙げたり。<sup>(3)</sup>（傍線は論者が付す。）

簡明で適確な解説である。これと現行の諸教材の概説とは驚くほど近似している。このような影響力のある著作の一部（傍線部）だ

けを踏襲し、無批判に盲従した結果、この認識が一般化し、固定したのかもしれない。ところが、そう即断するにはまだ問題が残る。藤岡氏の筆致にすでに文徳天皇始発の意識が認められるのではないだろうか。「文徳天皇の朝より」とは『大鏡』全体に関わるとしか考えられない。実は、さらに遡って、鎌倉時代以来、『大鏡』の始発はこのとおりに認識されてきたらしい徴証が見いだせる。たとえば、『水鏡』『増鏡』などには、たしかに、世継翁の語る『大鏡』は文徳以降を対象とすると明記されているのである。<sup>(4)</sup>

万寿の頃ほひ、世継と申しし、さかしき翁侍りき。文徳天皇よりのちつかたの事は、暗からず申しおきたるよし承はる。<sup>(5)</sup>（『水鏡』「序」）

大鏡、文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍しにや。<sup>(6)</sup>（『増鏡』「序」）

また、古本系『大鏡』に大宅世継翁の年齢が百九十歳とされていて、清和天皇讓位の貞観十八（八七六）年に生まれ、十三代の治世を経験したという他の箇所の記事と矛盾するのも、この固定認識に関与するのかもしれない。本来は貞観十八年生まれで百五十歳と設定されていたものが、堅固な文徳始発観の定着に基づいてそれに相応しい百九十歳に変更されていったとは考えられないであろうか。『大鏡』おける貞信公忠平の重要性を考慮に入れると、忠平時代に官仕えた世継の年齢百五十というのはこの上なく順当だからである。<sup>(7)</sup>

それではこのような固定した認識は何に基づくのであろうか。あるいは、『大鏡』が六国史ではなくて四国史（『文徳実録』『三代実録』

の二「実録」を除く、『日本書紀』から『続日本後紀』までの四「紀」を継承するという理解によるのかもしれない。<sup>(8)</sup> また、あるいは、記紀成立以前の諸氏族が独自の系譜的伝承とともに、その系譜を権威付けるために天皇家の系譜的伝承（帝紀）をも合せ持つていたらしいこと、つまり各氏族が常に「本辞」の前に「帝紀」を付帯させていたらしいこと<sup>(9)</sup> に関与するのかもしれない。しかし、より根本的には、古代から現代に至る歴史書一般の形式と『大鏡』の形式との差異によると考えられるのである。以下にそれについて若干の私見を述べる。

歴史は時間の中にある。時間の流れに従って推移する。歴史が叙述されるとき、時間的秩序に基づいて歴史事象が位置付けられるのは自然であり、穏当である。『古事記』『日本書紀』以来——おそらくはそのるか以前から——歴史事実は時間によって配列されるのが常であった。たとえば、『類聚国史』では歴史的事項が整然と類別されるが、これも六国史の記述が基盤になつていて、しかも各分類項目内は時間に秩序づけられている。個人の伝記や日記、物語文学までもが例外なく時間の流れによつて構成される。このように、史実が叙述される場合は編年体によるのが普通（当然）で、それ以外の形式はほとんど想定されていなかったと思われる。（これは現在でもほぼ言えることであろう。）

また、正史（六国史）はそれぞれが時間的に連続して間断しないところに重大な意味がある。六書を繋いで通史が完成するからこそ貴重なかもしれない。実際、六国史を継承しようとする試みは長く続けられた。日本人の特性として、「持続」そのものに価値を認め

る傾向が指摘されているほどである。<sup>(10)</sup> したがって、この国では、いつからいつまで（の持続）を対象にするかが歴史書の価値や性格などの一側面を決定すると考えてよいであろう。歴史は悠久の時間の連続によつて理解され、歴史書はその悠久の時間の一部分を切り取つて成り立つという通念の存在を想定しても過誤はないであろう。あらゆる歴史書は、直線としての歴史の適当な部分を適当な長さに分断して得られた線分として認識されるという通念である。

この通念に従うと、歴史書に類する作品はすべて線分的な時間で内容が規定されなければならない。その時間を表すには、年号か天皇の治世によるのが最も自然で、簡便だつたと思われる。それ以外の方法が想像できるであろうか。そこで、歴史書とそれに類する書物には天皇名や元号による性格規定が伴うという通則が生起してしまふ。歴史を題材とする『大鏡』もこの通則から自由ではあり得ない。文徳天皇・嘉祥三年から始まり、十四代、百七十六年間を対象とする作品として認定されて初めて（日本の）史学史の一角を占めることが許されるのであろう。つい最近まで『大鏡』は文芸であるよりもはるかに歴史（書）であつた。

しかし、この通念・通則に盲従する限りは『大鏡』の内実はほとんどとらえられない。文徳始発としたのでは作品全体から乖離するのは言うまでもなく、仮に、鎌足や冬嗣の時代を起点と考えてみても実状に反することに変わりはない。『大鏡』は時間の秩序にそれほど束縛されないのである。つまり、従来の通念を克服して、通則では計り切れない独自の形式を創始しているとも見なせる。このことは、一般に、『大鏡』が編年体によらないで、紀伝体を採用したと説

明されること（表1参照）と一致するようである。ところが、ここにもう一つの問題点がある。

## 二

『史記』に始まる本来の紀伝体は、歴史を全体的に描き出すのに適した形式である。すなわち、天子の伝記とも言える「本紀」と臣下の業績を記す「列伝」その他からなっていて、「紀」で大綱を包括し、「伝」で細目を評述できる利点をもつものと見なされる。一方、同じく紀伝体と呼ばれる『大鏡』の体裁にはそのような機能はほとんど見いだせないのである。すべてを網羅的にとらえるためではなくて、後述するように、ある単一の目的のために案出された形跡が顕著に認められる。

『大鏡』の「本紀」には、歴代の父母・外祖父の紹介に始まって、生誕・元服・立坊・即位・在位期間などの各天皇の経歴が年譜的に列挙されていき、末尾に母後の略歴が添えられる。整然とした構成と言えよう。ところが、これでは天皇の業績や在位中の事件はほとんど掲載されないことになる。それが最も端的に現れるのが「光孝天皇紀」である。父・母・外祖父のことに続いて、誕生以来四品・中務卿・三品・上野大守・大宰権帥・二品・式部卿・一品・大宰帥を経験した事実が年次に従って克明に列記されるのに、即位後に関しては「この御時に、ふちつばのうへの御つばねのくろどはあきたると、きくはべるは、まことにや。」（四五頁）という一文しかない。これは、天皇の存在や治世の実際よりも、帝位に至る過程に関心が

偏在していることを意味する。<sup>(1)</sup>「本紀」というよりは、むしろ、漢文の正史や私撰の国史における「即位前紀」に相当する。これを、光孝天皇が即位時に例外的に高齢であつて、そのために在位期間が例外的に短かつた事実<sup>(2)</sup>に導かれた例外的な現象と見なすことはできない。他の「紀」でも治世よりも即位までの経過に主眼が置かれる点はほぼ共通するからである。三条・花山二帝に限っては即位後の事象が詳述されるが、これらには『大鏡』の主題に基づき、やや特殊な事情を想定したことがある。<sup>(3)</sup> いずれにしても、『大鏡』の「本紀」は、『今鏡』や『水鏡』のそれに比べても異質で、本来の「紀」とはかなり本質を異にすると言わなければならない。

『大鏡』の「大臣列伝」も本来の「列伝」とは根本的に異なるように思われる。たとえば、『大鏡』で「伝」と呼ばれる纏まりは、決して個人の伝記ではなく、一人の人物を始祖とする子孫・一族の運命を明らかにする意図を強く表していることが注目される。多くの「伝」は本人以上に子孫の動向に多くの紙幅が与えられるのである。これは、王朝貴族にとつての「栄華」が、一人の人間が富み栄えることだけを意味するのではなくて、子孫も同様に繁栄しなければ成り立たないもの<sup>(4)</sup>だった事実にも関係するが、『大鏡』の「伝」が単に個人の伝記ではないことは間違いない。また、『大鏡』に「伝」を設置される人物はすべて藤原冬嗣とその血統を受け継ぐ子裔に限られるという偏向も見いだせる。つまり、『大鏡』の「列伝」は冬嗣流藤原氏の巨大な系図の文章化されたものを基底に潜在させるのである。「大臣列伝」とはこの大系図を骨格にしてその上に逸話（挿話）が適宜はめ込まれたものと理解するのも可能であろう。<sup>(5)</sup>

このように、『大鏡』の「本紀」「列伝」ともに本来のものとはかなり異質な組成をもつ。『大鏡』の組織を紀伝体と断定することにも躊躇せざるを得ないであろう。特に主要部「大臣列伝」が編年体の束縛からもほとんど解放された点が注目される。時間の秩序に代つて系図という別種の秩序を獲得したとさえ言えるのである。それでは、『大鏡』の新組織はどのように機能するのであるうか。

まず明らかなのは、『大鏡』の形態は歴史（もしくは一時代）の全体像を理解させるには不適合で、むしろ単一の目的、唯一の目標を指して構築されているということである。そして、この標的は、言うまでもなく、御堂関白藤原道長の空前絶後の栄華とその由来であり、それは世継翁によつて明快に告知されている。

まめやかに世次が申さんと思ことは、ことごとくかは。たゞいまの入道殿下（道長）の御ありさまの、よにすぐれておはしますことを、道俗男女のおまへにて申さんとおもふが、いとことおほくなりて、あまたの帝王・后、又大臣・公卿の御うへをつゞくべきなり。そのなかにさいはひ人におはしますこの御ありさま申さむとおもふほどに、世の中のこのかくれなくあらはるべき也。つてにうけたまはれば、法華經一部をときたてまつらんとてこそ、まづ余教をばときたまひけれ。それをなづけて五時教とはいふにこそはあなれ。しかのごとくに、入道殿の御さかへを申さんとおもふほどに、余教のとかるゝといひつべし

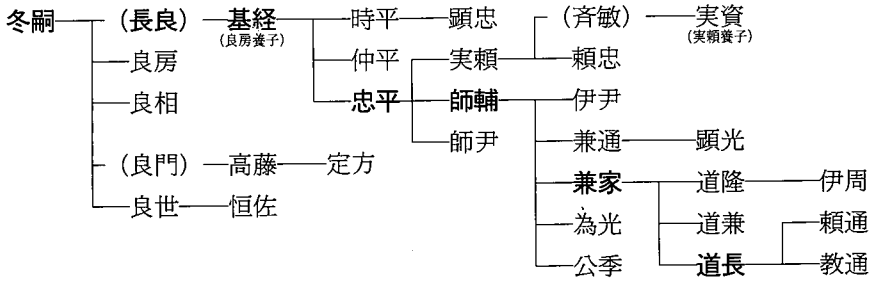
（「序」三九頁）

帝王の御次第は、申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄花もなにゝよりひらけたまふぞと思へば、先みかど・後の御あり

さまを申へき也。うゑきは、根をおほくておほくてイ本つくりつくるひおほしたてつればこそ、枝もしげりて、このみをもむすべや。しかればまづ帝王の御つゞきをおぼえて、つぎに大臣のつゞきはあかさんと也（「天皇本紀跋」五八頁）

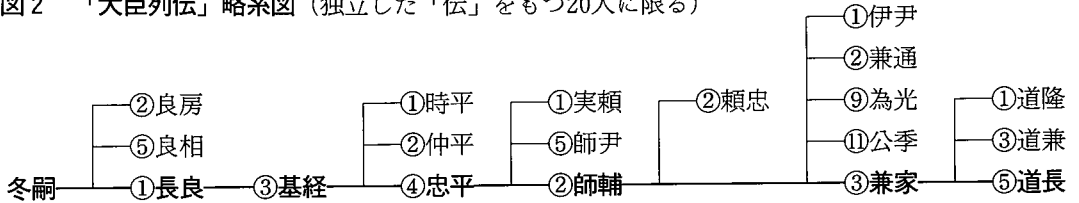
『大鏡』に数多くの人物（天皇・后妃・大臣・公卿）が登場するのも、長期間にわたる歴史事象が纏述されるのも、すべて道長一人の栄華とその由来を究明するためにほかならないと揚言する。「紀」も「伝」も一貫して道長栄華の闡明に奉仕すると言うのである。実際、これに従つて読解を試みると、『大鏡』の特異な編成や叙述は納得できる点が少なくない。たとえば、「本紀」には各天皇の即位までの過程とそれぞれの母後の経歴とが特記されるという特徴が指摘できるが、これは藤原冬嗣の家系が母後の存在を介して皇統と血脈的に連結する実態を顕示するためと考えられる。「天皇本紀」は冬嗣に始まつて道長に帰着する貴族の一系流が繁栄する一条件として設置されたと言つても過言ではない。<sup>15</sup>また、「列伝」の系図的構成は道長の栄華が確定する過程と読み替えることができる。「伝」を特設された二十人の有力者の内、冬嗣―長良―基経―忠平―師輔―兼家と続く道長直系の父祖六人と、それ以外の十三人とは明らかに扱われ方を異にする。直系（正系）六人は道長繁栄の前提として競争者・政敵となる兄弟（十三人の「伝」をもつ大臣）を何かの点で必ず凌駕するように配慮されている。一方、正系から外れる十三人の「伝」には例外なく子孫が衰退・没落していく有様が克明に描写されるのである。その結果、栄華の可能性が子孫道長に受け継がれることになる。正系六人が必ず各兄弟の最末尾に配置されるのもこのため

図1 万寿二年までの冬嗣流大臣経験者



(注) 太字は「大臣列伝」の正系を表す。  
( ) は大臣未経験者。

図2 「大臣列伝」略系図 (独立した「伝」をもつ20人に限る)



(注) 各兄弟は「大臣列伝」では上から下に順次配列される。  
○内数字は兄弟の出生順を、太字は正系をあらわす。

あろう(16) (図1・2参照)。

こうして、『大鏡』の紀伝体と呼ばれる形態は、道長一人に未曾有の成功がもたらされた理由を究明する目的に沿って考案された、独特のものであることが想定できる。「本紀」が文徳天皇に始まって、「列伝」の冒頭に冬嗣が置かれ、「藤氏物語」に大化改新までが視野に加えられるのもすべてこの目的のために必然的に決定されたことと考えられる。

『大鏡』の価値は、明確な目的に応じた新形態を独創したところにある。それを紀伝体で一括してしまうのはある意味で危険であろう。不正確な理解が導かれるかもしれない。「昔物語」に限ってはこの同じ目的に依っていないようでもあるが、ゆるやかな秩序は指摘できる。

以上のように、文徳天皇即位より古い時代が扱われず、紀伝体がい用いられているという教材一般の記述内容を虚心に受け入れると、『大鏡』という作品の重要な要素がかなり看過されてしまいかねないのである。そして、このことは、『大鏡』の本文の一部が教科書などに採録されて学習される場合にも影響しないはずはない。

三

高等学校の国語II・古典(総合・古文)などの教科書に『大鏡』が取り上げられる確率は決して低くない(表2参照)。採取に偏りがあるのは否めないが、それぞれが『大鏡』の神髄とも言える佳話であり、いずれの部分にも人口に膾炙した、印象的な場面が含まれて

表2 平成元年度用教科書に採録された『大鏡』

(数字は採録件数を表す)

記 事		国 語 II	古 典 総 合	古 典 古 文	計
花山天皇、兼家・道兼らの策謀によって出家退位する	(花 山 院 紀)	4	3	10	17
道長、中関白家での競射で伊周を圧倒する(弓争い)	(道 長 伝)	5	1	9	15
夏山繁樹、清涼殿前の梅を探して紀貫之女に遭遇する	(昔 物 語)	1	1	12	14
肝試しで、道長が兄道隆・道兼を凌駕する意力を示す	(道 長 伝)	5	3	5	13
公任、大井川の船遊びで「三舟の才」をみとめられる	(頼 忠 伝)		2	10	12
菅原道真、時平の讒言によって太宰権帥に左遷される	(時 平 伝)		4	7	11
姉詮子女院の尽力で、伊周を制して道長が関白になる	(道 長 伝)		4	7	11
雲林院の菩提講で超老人たちが再会し、昔語を始める	( 序 )		1	8	9
道長、才人公任を凌駕することを父・二兄の前で誓う	(道 長 伝)	1	1	7	9
時平と醍醐帝が巧みに示し合わせて華美の弊をとめる	(時 平 伝)			7	7
兼通、弟兼家を憎悪して非道にも官位昇進などを阻む	(兼 通 伝)			5	5
時平に極度の笑癖があり、その恩恵で道真が裁決する	(時 平 伝)			4	4
道真が雷神になり、時平が王威を借りてそれを鎮める	(時 平 伝)			4	4
神に能書を認められた佐理が三島明神の額に揮毫する	(頼 忠 伝)			4	4
村上帝女御芳子の髪的美しさと『古今集』暗誦のこと	(師 尹 伝)			4	4
兼家、『蜻蛉日記』の作者を妻とし、歌の贈答をする	(兼 家 伝)		1	3	4
道長、気後れする伊周と双六に興じて、かつ勝利する	(道 隆 伝)			4	4
道長、不興の隆家の入れ紐を自ら解いて宴を盛上げる	(道 隆 伝)	1		3	4
講師が登壇し、老翁らを見失って、昔語りが終わる	( 跋 )			4	4
公任、軽率な失言をして後に詮子の女房に報復される	(頼 忠 伝)			3	3
醍醐帝が貫之と躬恒を召して卓越した歌才を賞賛する	(昔 物 語)		1	2	3
世継と繁樹がこの昔語りの主旨を語り合って交歓する	(天 皇 紀 跋)		1	1	2
師輔、百鬼夜行に会うが動揺することなく退散させる	(師 輔 伝)			2	2
三月上巳の禊で、道長の従者が意気で伊周を圧倒する	(道 長 伝)	1		1	2
夏山繁樹の後妻がかつて女流歌人中務につかえたこと	(昔 物 語)			2	2
才人行成、後一条幼帝の玩具に秀抜な独樂を献上する	(伊 尹 伝)			2	2
清照法橋が清範律師の説法の機知才覚に感心したこと	(昔 物 語)			2	2
安子は芳子に激しく嫉妬するが、慈愛深い面もあった	(師 輔 伝)			1	1
師輔の夢に現れた吉兆が一女房の夢合せに妨げられる	(師 輔 伝)			1	1
諸芸に長じる行成も和歌の方面だけは苦手だったこと	(伊 尹 伝)			1	1
行成、天皇に趣向を凝らした扇を献上して賞賛される	(伊 尹 伝)			1	1
中納言就任で弟斉信に先を越された誠信が悪霊となる	(為 光 伝)			1	1
兼通の酒肴のために殺されそうな雉を高階業遠が救う	(兼 通 伝)		1		1
兼家室時姫が夕占問いをして、一門の繁栄を予知する	(兼 家 伝)			1	1
東宮三条院の命に従って尚侍綏子が氷を持ちつづける	(兼 家 伝)			1	1
兼家の5子息のうち時姫腹の3人が特にすぐれること	(兼 家 伝)			1	1
道隆、飲酒を大変好み、泥酔から覚めるのが早いこと	(道 隆 伝)			1	1
藤原氏の始祖鎌足と、代々の氏神・氏寺・法会のこと	(藤 氏 物 語)			1	1
世継が見た最初の大事件が光孝天皇即位の騒動だった	(昔 物 語)			1	1
宇多天皇に賀茂明神の託宣があって、臨時祭が始まる	(昔 物 語)			1	1
醍醐天皇の人柄・仁政・好尚と、在位中の逸事の数々	(昔 物 語)			1	1
村上天皇の親しみ深く、優美で、寛容な人間性のこと	(昔 物 語)			1	1
世継の妻のことと彼女が親しんだ良岑衆樹の宰相就任	(昔 物 語)			1	1
円融院、実資の供で石清水八幡宮の臨時祭を見物する	(昔 物 語)			1	1
宇多上皇の御幸に遊女白女(大江玉淵女)が歌を詠む	(昔 物 語)			1	1



いる。

これらの頻繁に教材化される箇所には、次の二つの特質のいずれか（あるいは両方）が容易に見いだせる。一つは内容そのものが純粹に興味に富んでいることで、もう一つは批判的な歴史意識に基づいて政権抗争の裏面を暴露して興味深いことである。紀貫之の女むすめと夏山繁樹の邂逅（いわゆる「鶯宿梅」の話）、大納言公任の三船の才の榮譽、長く美しい黒髪をもつ女御芳子の『古今集』暗唱などが前者を代表し、後者には花山天皇の出家退位事件、中関白家の私邸で行われた道長と伊周の競射、道隆・道兼・道長三兄弟の肝試し、菅原道真が太宰府に左遷された悲劇、道長関白（内覧）宣下につまわる秘話などの政治上の大事件が該当する。また、後者には前者の説話的興趣も豊富に盛り込まれている。このような、文芸的にすぐれた一節を採取する姿勢は至当であり、『大鏡』本来の性格とも齟齬しない。しかし、前述した『大鏡』全体の構造にまで視野を広げてこれらの箇所を味読する場合と、教科書に採録された部分のみを享受する場合とは理解の懸隔が甚だしいと言わざるを得ない。そのうえ、一般的な解説によって得られた固定認識に安易に従うならば、不確実な理解に誘導されてしまうのを完全には回避できないであろう。この二つのほかにも、教材化されるに際しての『大鏡』の特色として、斬新な対話形式、標準的な古文文法が適切に使用されている点などが指摘されるが、以下には、特に上述の二点——説話的興趣と鋭敏な歴史批判——を問題にする。副教材や教科書の解説文による『大鏡』理解の典型——文徳帝の嘉祥三年から後一条帝の万寿二年までの一七六年間を対象とする紀伝体の歴史文学——に最も

関係が深いのはこの二点だからである。

まず、『大鏡』を説話集と等質に扱って、その説話的要素だけを抽出するという教授法があり得るとすれば、そこに一つの陥穽が待っている。たしかに、『大鏡』には説話文学としても高く評価できる一面があり、形成の過程にも説話文学との共通性が指摘できるのである。<sup>(21)</sup>この作品が長く古典として愛読されてきたのは、多く説話的興味に依拠しているからに違いない。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』などと類似した享受の歴史が想定できる。新奇な話、異常な話、教訓的な話の中から時代や文芸の新しさが発見されることも少なくないのである。

しかしながら、このような享受法や教授法は『大鏡』の文学的達成とは根本的に対立する。史学史上に特筆される新しさにも矛盾する。本来の『大鏡』は、一つの明確な方針に貫かれていて、それに対応した緊密な構成を基盤にする統一的な作品であった。収載される数多くの逸話（挿話）は単一の目標に到達するために選択され、加工され、創造されたものにほかならない。単独で光彩を放つ逸話がどんなに多く存在しても、それらはすべてある秩序に従い、一定の方向に向かって機能しているはずである。個々の部分が説話文学としてどんなにすぐれていても、それは『大鏡』全編を覆い尽くす強固な論理に制約されている。各逸話はこの論理に沿って適所に組み込まれ、作品全体の運動に奉仕するとも考えられる。もし仮に一つの挿話を独立させて享受してみると、それだけでは理解できない不可解な記述が見いだされるであろう。ここに歴史物語と説話文学の決定的な相違点がある。説話文学の一話は分離して差支えないが、

『大鏡』の一話は摘出しては享受できない。分離独立した逸話もはや『大鏡』の構成要素にはなり得ないとも言えるのである。

次に、教材に採択されている挿話が批判精神や裏面暴露性によって選出された場合に言及しておく。ここでの問題点は、各事件・事象がどのような意味をもち、各批判・暴露がどの方向を向いているかを正確に把握できないのではないかという一点にある。『大鏡』世界に摘出される歴史事象はそれぞれが歴史の変動に大きく係わる。歴史的事件の最も重要な一瞬や一場面が活写されている。しかし、それらの意義は当該箇所<sup>(22)</sup>の文面からはほとんど察知できない。作品の他の部分(かなり離れた箇所にある記事)、あるいは『栄花物語』に見られるような編年史的知識があつて初めて納得できるのである。この点でもやはり『大鏡』の一部分はそれだけでは十分に享受できないことが確認できる。

また、『大鏡』の批判・暴露などは決して道長の興隆を妨げるものではないことも注目されなければならない。前述のように『大鏡』の組織は道長という個人に空前の隆盛がもたらされた経過を究明する(批判する)目的に即して案出されたもので、大多数の挿話はその目的に貢献していると思われる。焦点は飽くまでも道長一人の繁栄にあつて、藤原氏全部・藤原北家などの氏や家の繁栄にはない。ただ、道長直系の父祖六人(正系)の繁栄は重視されるが、それも道長繁栄の絶対条件であるからに過ぎない。そのうえ、この六人にして、道長には遠く及ばないことが明示されるのである。<sup>(23)</sup>したがつて、たとえ、藤原氏一族の誰かの陰謀が暴き出されたり、道長の父祖の一人にあつた大きな汚点が剔抉されたとしても、道長の前途の

障害にはならないことになる。批判精神も裏面暴露も結局は道長に成功を招き寄せる方向に作用し、決して道長の生涯に瑕瑾を残さないのである。公平な批判や無差別的な暴露は行われていないと言わなければならない。

『大鏡』は説話集ではない。明確な目的に沿つて記事が配置され、「昔物語」の部分を除くほとんどすべての記述が一目的の成就に寄与する。ところが、その目的が道長一人の繁栄というきわめて限定された領域に収束してしまうため、教材としてこの作品のある一ヶ所が取り上げられるときに全体の秩序におけるその部分の機能が十分に理解されないで、不正確な読解がなされる可能性が高いのである。さらに、教材・副教材に成文化された解説の不正確さにそれが助長されるのも危惧されよう。詳細は別稿に論じるが、以下にそれらの実例を簡単に提示する。

#### 四

『大鏡』の本文で教科書に最も多く採録されるのは、「花山院紀」の花山天皇出家退位の経緯である。この一節を指導する際には、『栄花物語』の同一事件の扱い方と比較して『大鏡』の特質や批判性を鮮明にすべきことが提唱<sup>(24)</sup>されている。寵妃祇子の薨去による花山帝の悲傷のみに突然の出家の原因を求める『栄花』に對比すると、『大鏡』に藤原兼家・道兼父子らの悪辣で計画的な陰謀が、つまり歴史の奥深くに沈潜するもう一つの真実が摘記されていることが鮮明になる。『栄花物語』が歴史を感性的に捉えて宮廷社会の激動に浮沈す

る人々の情感を中心に叙述し、『大鏡』がその激動の過程や因由を理性的に究明しようとしているなど、両書の志向するところは根本的に異なっている。<sup>(26)</sup>したがって、この対比はどのような『大鏡』の特質を知る上で非常に有効である。また、『栄花』の叙述によって前後の状況、事件のもたらした影響の大きさなどの知識もある程度は補えるかもしれないが、この逸話を十全に理解するには各登場人物の経歴や当時の政局の実情をも概観しておかなければならないであろう。<sup>(26)</sup>こうして、花山院に対する同情、道兼ら藤原一族の策謀に対する義憤などの思いが涌出し、さらに、次に即位した一条天皇が兼家の外孫(道兼らの外甥)として天皇と兼家一門との姻戚関係を保障する存在である事実を知るなら、当時の王朝貴族の権力の実体と彼らの権勢欲の凄まじさが感得できるとも指摘されている。<sup>(27)</sup>こうした諸点からこの一節は教材に相応しいとされるのである。

しかしながら、『大鏡』全編の構想に照らすと如上の理解は正確ではない。事件の史的意味についての認識に不十分な点がある。本文に記されていない一条帝擁立の意義の説明を加えても真の理解には至り得ない。この一節が言葉どおりに「あましましくさぶらひしこと」(五一頁)や「あはれなること」(同)を語るものでないことは言うまでもないが、花山帝を退位に追い込んだ上に帝とともに出家生活をおくるといふ誓いまでも平然と破る道兼の非道や、その道兼が万一家を強制される場合に備えて警護の武者に一行を尾行させていた父兼家の狡猾さが、十九歳の新帝がわずか二年で退位した史実の裏に隠されていたことを読み取っただけでは、『大鏡』にこの記事が存在している意味を知ったことにはならないのである。ここにおい

て留意されなければならないのは、たとえば「道兼伝」の次の一節である。

この君(道兼三男兼綱)の、頭とられたまし、いとみじく侍しことぞかし。頭になりておどろきよろこびたまふべきならねど、あるべきことにてあるに、粟田殿(道兼)、花山院すかしおろしたてまつり、左衛門督(道兼二男兼隆)、小一条院すかしおろしたてまつり給へり。みかど・春宮の御あたりちかづかでありぬべきぞうといふ事のいできにしぞ、いと希有に侍きな。<sup>(28)</sup>  
〇〇・二〇一頁

道兼の非道は家門の失墜に繋がると見なされている。そして、このことが「この粟田殿(道兼)の御ありさま、ことのほかにあえなくおはしましき。さるは、御心いとなさけなくおそろしくて、人にいみじうをぢられたまへりしとの、あやしくすゑなくてやみたまひにしなり。」(二〇一・二〇二頁)と惜しまれる道兼の子孫滅亡の第一の原因になる。史実はともかく、『大鏡』では花山院退位の策謀は道兼一人の悪事となつて、道兼家の衰運を導き出しはするが、兼家や道隆や道長の汚点になつてその発展を阻む要因とはなっていないのである。それどころか、道兼の自滅は弟道長の栄華の絶対条件になる。<sup>(29)</sup>つまり、『大鏡』は、純粹に、公正に、あるいは倫理的に政治的事件を追求・批評するのではなくて、道長の栄華の由来を証明するための逸話だけを掲載しているとさえ見なせる。花山院退位事件の真相究明はじつは巨大な構想の一要素としての役割を果たすのである。この点を軽視しては作品の読解はできないのではないだろうか。<sup>(30)</sup>

次に、菅原道真左遷の一件に触れておく。無実の罪で刑に服した

前右大臣道真の失意の様相は、彼が非藤原氏であるにもかかわらず「時平伝」の大部分を費やして同情を込めて詳述されている。

ともによのまつりごとをせしめ給しあひだ、右大臣（道真）は才よにすぐれめでたくおはしましし、御こゝろをきてもことのほかにかしこくおはします。左大臣（時平）は、御としもわか、才もことのほかにおとり給たまにより、右大臣の御おぼえ事のほかにおはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿五日、大宰権帥になしたてまつりてながされ給ふ。（七一頁）

信望厚い道真を危険視する藤原時平の妬心が非劇を招いたのであり、藤原氏発展のための犠牲者道真に深い同情が集まることになる。（この後に配流の道途や九州太宰府での悲嘆が繰り返して訴えられる。）この一段の主役は道真で、藤原氏の権勢を守り、強化させた時平の功績が付加的に表されているというのが一般的な理解かもしれない。ところが、『大鏡』全体の論理の中では必ずしもそうではない。

このおとゞ（時平男頭忠）のみぞ、御ぞうの中に、六十余までおはせし。（中略）これよりほかの君達皆卅余・四十にすぎ給はず。其故は、たの事にあらず、この北野（道真）の御なげきになんあるべき。（中略）あさましき悪事を申をこなひたまへりし罪により、このおとゞ（時平）の御末はおはせぬなり。さるは、やまとだましひなどはいみじくおはしましたるものを。（七九

頁）

これを顕示するために世継翁は道真の悲劇を縷言したとさえ考えられる。道真に対する同情はそのまま時平の悪事の強調になり、それが時平と彼の子裔の衰滅を導くことになる。これが『大鏡』の論理である。「時平伝」は時平の系統が正系になれなかつたことの根拠を証する点に重要な目的が存するのである。時平の没落は道長の祖忠平の繁栄に直結し、究極的には道長の成功を保証する要因の一つになる。道真への思い入れを誘うのが第一の目的ではなかつた。道真の悲劇は、『大鏡』の構成上は、時平の年譜の間に狭み込まれている形になる。時平の運命の説明のために道真が登場させられたとも考えられる。『大鏡』の「列伝」に冬嗣流藤原氏以外の氏族への追求はなく、藤原氏の他氏排斥は決して記載されないのである。<sup>31</sup>

おそらく、このほかにも源高明・藤原伊周の左遷が『大鏡』の対象とする時代の重大事件・一大悲劇として、広く関心を集めたことであろう。しかし、『大鏡』には、この二人の配流の描出はほとんどない。道真の場合は時平流に不利な要因となつて、道長の栄華に貢献するが、それに対して高明の悲嘆は師尹を没落させるが、道長の父親兼家にも傷をつけざるを得ない（師輔伝）。伊周は道長を直接怨嗟するはずの人物であつて、これに同情することは道長に時平と同じ運命を辿らせることにもなりかねない。このように考えると、道真左遷事件は『大鏡』の論理の中で明確に位置付けられることが明らかになるであろう。

## 結

『大鏡』は統一性をもつ作品である。「昔物語」は除かれるべきかもしれないが、道長の栄華の追究という目的のために各要素が各様に貢献している。説話文学とは截然と区別されなければならない。

このことを看過しては、『大鏡』の本質は掌握できない。古典としてのこの作品を分析して一つ一つの逸話を独立したものと見て享受する立場の最終的な是非は判然としない。即断するべきではないかもしれない。個々の挿話にも価値は認められる。しかし、そうであっても、分断された『大鏡』はすでに『大鏡』ではないと考えなければならぬ。このように、『大鏡』は文学史上特異な一書なのである。留意すべき点はこの点にある。

高等学校以上で使用される教材に『大鏡』が紹介される際にもこの点は無視できない。ただし、そのための具体的な方策は提示できなかった。作品全体を常に視界に収めた上で、部分を読解し、鑑賞する以外にないようにも思われる。しかし、一般の学習者にはそこまでは要求できないであろう。高校生に一つの古典に真に通暁する機会はほとんどないであろう。授業時間は限られている。そうすると、作品全体に目を配るのは教職にある者の責務なのかもしれない。

### 注

(1) 増淵恒吉著『古典教育論』(増淵恒吉国語教育論集上巻、有精堂、昭和五十六年刊) 一九・一四一頁など。

(2) 『大鏡』本文の引用は、松村博司校注『大鏡』(日本古典文学大系21、岩

波書店、昭和三十五年刊) による。

(3) 藤岡作太郎著『国文学全史平安朝篇(四)』(講談社学術文庫、昭和五十二年刊) 五二頁。

なお、同様の筆づかいは、芳賀矢一にも見られる。

次に大鏡に記されて居る期間は文徳天皇から後一条天皇に至つて居る。さうして天皇の御伝とともに、藤原氏をとり冬嗣から道長にまで至る列伝を述べて居る。即ち帝王十四代で百七十五年ほどの年代を含んで居る。(芳賀矢一「歴史物語」(芳賀矢一遺著「富山房、昭和三年刊」二六頁)

(4) 『日本紀私抄』には、「自文徳至後一条十五帝/自冬嗣公至道長公七代歟」とある。

(5) 和田英松校訂『水鏡』(岩波文庫、昭和五年刊) 一八頁。

(6) 時枝誠記・木藤才蔵校注『増鏡』(神皇正統記 増鏡 日本古典文学大系87、岩波書店、昭和四十年刊) 二四九頁。

(7) 拙稿『大鏡』における藤原忠平の栄華』(『日本文芸論稿』第十二・十三合併号、昭和五十八年七月) 参照。

なお、石川徹氏は『大鏡』の現時点(雲林院の菩提講の際に昔語りが行われた時点)は万寿二年からちょうど四十年後の康平八(一〇八五)年であり、百九十歳の世継翁が百五十歳当時までを回想するものと『大鏡』を見なして、矛盾の解消を試みられる。しかし、拙論のようにも十分考えられるのではないだろうか。再検討してみたい。石川徹「百九十歳の老翁に語らせる『大鏡』の警拔な構想とその抱負」(『帝京大学文学部紀要(国語国文学)』第二十号、昭和六十三年十月)、同「解説」(『大鏡』新潮日本古典集成、新潮社、平成元年六月)、同「大鏡」(序)の二つの嘘と一つのま

こと——万寿二年は過ぎ去った昔——」(『文学・語学』第二二二号、平成元年八月) 参照。

(8) 菅野雅雄「大鏡の構想にみる伝承的要素」(『国学院雑誌』第六十五巻第五号、昭和三十九年五月) 参照。

(9) 石田一良著『時代区分の思想』(ベリかん社、昭和六十一年刊) 二六—三一頁参照。

(10) 相良亨「持続の価値」(同著『日本人の心』東京大学出版会、昭和五十九年刊)。

(11) 拙稿『大鏡』の編年史的側面——『栄花物語』の克服と追認——」(『島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)』第二二巻第二号、昭和六十三年十二月) 参照。

(12) 拙稿『大鏡』の構想と皇位継承過程——「正統」の確定と顕在化——」(『島大國文』第十七号、昭和六十三年十一月) 参照。

(13) 松村博司著『栄花物語全注釈(三)』(角川書店、昭和四十七年刊) 二〇〇頁、同他著『栄花物語・紫式部日記』(鑑賞日本古典文学第十一巻、角川書店、昭和五十一年刊) 一〇五・一〇六頁など参照。

(14) 拙稿『大鏡』「大臣列伝」の考察——冬嗣流藤原氏「正系」決定過程をめぐって——」(秋田短期大学『論叢』第三十五号、昭和六十年三月) 参照。

(15) 「天皇本紀」についての詳細は、前掲拙稿(11)・(12)など参照。

(16) 「大臣列伝」についての詳細は、前掲拙稿(7)・(14)など参照。

(17) 安西迪夫「大鏡『昔物語』の構成」(『国文学言語と文芸』第五十八号、昭和四十三年五月、同著『歴史物語の史実と虚構——円融院の周辺——』(桜楓社、昭和六十二年刊)に再録) 参照。

(18) 「日本文学史」などの解説には必ず『大鏡』の批判性が称揚されている。

(19) 平塚寛次郎「教材としての『大鏡』」(『大鏡』古文研究シリーズ14、尚学図書、昭和五十九年五月) 参照。

(20) このような観点は、小泉立身「大鏡教授上の問題点」(『国文学解釈と教材の研究』第二巻第十二号、昭和三十二年十二月) などに認められる。

(21) 松村博司「解説」(『大鏡』日本古典文学大系21、岩波書店、昭和三十五年刊)、川口久雄「大鏡の成立と時代」(『国文学解釈と教材の研究』第二巻第十二号、昭和三十二年十二月) など参照。

(22) (11) に同じ。

(23) (14) に同じ。

(24) 増淵恒吉著前掲書(1) 三九頁、六五頁、一五六頁など。

(25) (11) に同じ。

(26) (19) に同じ。

(27) 平塚寛次郎前掲論文(19)。

(28) ( ) 内の補足説明は論者が補った。(以下同じ)。

(29) 道長の栄華に大きく寄与する父兼家も糾弾はされていないようである。

(30) なお、「伊尹伝」には花山院の異常な性格が紹介されて、帝王たる資質に欠けることが示されているが、ここに院に皇位が永続しなかった原因が見いだせる。実はこれも『大鏡』の構想には不可欠な記事と思われる。花山帝時代が持続することは伊尹家の再興に直結し、また兼家政権の実現をおくれさせて、道長興起を妨げるからである。

(31) (14) に同じ。

『大鏡』本文採録教科書

教科書名

出版社

〔国語II〕

- |    |                    |       |    |   |       |
|----|--------------------|-------|----|---|-------|
| 1  | 明解国語II             | 三省堂   | 20 | 古文 枕草子 大鏡 源氏物語  | 三省堂   |
| 2  | 高等学校国語II (三訂版)     | 第一学習社 | 21 | 大鏡・枕草子・源氏物語   | 清水書院  |
| 3  | 高等学校国語II 三訂版       | 大修館書店 | 22 | 古典(古文) 平安文学選(伊勢物語・源氏物語・大鏡)                                    | 筑摩書房  |
| 4  | 高等学校新国語II          | 大修館書店 | 23 | 徒然草・枕草子・源氏物語・大鏡・古典評論  | 日栄社   |
| 5  | 高等学校精選国語II 三訂版     | 角川書店  | 24 | 古典(古文) 大鏡   | 光村図書  |
| 6  | 高等学校総合国語II 三訂版     | 角川書店  | 25 | 古典 古文―伊勢物語・大和物語・源氏物語・大鏡・源氏物語<br>玉の小櫛―                         | 明治書院  |
| 7  | 高等学校国語II 新訂版       | 尚学図書  | 26 | 古典 古文―徒然草・枕草子・源氏物語・大鏡・平家物語―                                   | 明治書院  |
| 8  | 新選国語II 三訂版         | 尚学図書  | 27 | 源氏物語・大鏡・評論(古文)  | 右文書院  |
| 9  | 標準国語II             | 尚学図書  | 28 | 高等学校古文 再訂版  | 旺文社   |
| 10 | 国語II               | 東京書籍  | 29 | 古文 改訂版  | 三省堂   |
| 11 | 国語II 改訂版           | 光村図書  | 30 | 新選 古文(古典) 三訂版   | 尚学図書  |
| 12 | 精選国語II 新訂版         | 明治書院  | 31 | 高等学校古典(古文)(三訂版)   | 第一学習社 |
|    | 〔古典(総合)〕           |       | 32 | 高等学校新編古典(古文)(二訂版)   | 第一学習社 |
| 13 | 高等学校古典(総合) 改訂版     | 旺文社   | 33 | 高等学校古文 三訂版  | 大修館書店 |
| 14 | 高等学校古典総合           | 角川書店  | 34 | 新選古文  | 日栄社   |
| 15 | 高校古典総合             | 三省堂   | 35 | 新編古文  | 明治書院  |
| 16 | 新選古典(総合)           | 尚学図書  | 36 | 高等学校古文<br>参考副教材   | 右文書院  |
| 17 | 総合古典               | 筑摩書房  |    | a 遠藤嘉基・池垣武郎著『注解日本文学史 八訂新版』(中央図書、一九六〇年初版、一九八七年八訂1刷、一九八九年八訂17刷) |       |
| 18 | 古典(総合)             | 東京書籍  |    | b 真下三郎・饗庭孝男監修『新編日本文学史』(第一学習社、一九六九年初版、一九八九年改訂26版)              |       |
|    | 〔古典(古文)〕           |       |    | c 麻生磯次・市古貞次・五味智英・長谷川泉・小高敏郎・大沢忠義著『日本                           |       |
| 19 | 古典文学選 更級日記・源氏物語・大鏡 | 角川書店  |    |   |       |

- 文学史（新版）（明治書院、一九七二年初版、一九八七年22版）
- d 松隈義勇・中野博雄著『簡明日本文学史』（日栄社、一九七四年初版、一九八八年65版）
- e 佐々木八郎・曾沢太吉・谷山茂・川副国基『新修日本文学史（新版）』（京都書房、一九七四年初版、一九七九年改訂版、一九八七年新版、一九八九年新版第5刷）
- f 檜谷昭彦著『高校日本文学史』（中央図書、一九八二年初版、一九八九年22版）
- g 市古貞次・長谷川泉・稻沢好章・榎本隆司・金井清一・久保田淳・篠原昭二編著『新編日本文学史 新訂版』（明治書院、一九八二年初版、一九八四年改訂新版初版、一九八八年新訂版初版、一九八九年新訂版再版）
- h 稻賀敬二・竹盛天雄監修『簡明日本文学史』（第一学習社、一九八三年初版、一九八九年改訂7版）
- i 島津忠夫・堀井哲夫『要点と展開 日本文学史』（京都書房、一九八四年初版、一九八八年初版第8刷）
- j 市古貞次・長谷川泉・稻沢好章・榎本隆司・金井清一・久保田淳・篠原昭二編著『明解日本文学史』（明治書院、一九八八年初版、一九八九年再版）